



即興小説まとめ (2015)



すべて撃ち殺す狂った弾丸

海

『海』

ある夜、僕は途方に暮れていた。
精神を病んで、大卒とともに就職した会社はたったの2カ月でやめた。
ろくに職歴もないし、新卒というカードを失って、精神病まで患った僕には、転職のあてもなかった。
バイトもコミュ障のせいで受からない。
体育会系じゃないし、肉体労働も嫌だ。
大卒なのに工場勤務とかもイケてない。
しょうがないので死ぬことにした。

でもなあ……首つりとかなあ。場所がないんだよなあ。
実家暮らしだから練炭も無理だし。
手首切るのは痛そう。
精神薬ODはやったけどよく眠れただけだった。
そこで僕は思った入水自殺しよう。
そうと決まれば善は急げだ。
僕はりんかい線に乗ってお台場に向かった。

東京テレポート駅から船の科学館まで歩いて10分。
僕は海辺に着いた。景気づけに瓶のスミノフアイスを飲んで、アメスピを吸った。
夜なので、対岸に見えるオレンジ色の光を放つ工場の夜景が綺麗である。
よし死ぬぞ！
そう思って海に近づく。
水面を見てみるとなんか浮いてる。木の破片みたいなやつ。
しかも今日なんか寒い。
完全に長袖の日だよ。半袖のポロシャツで来ちゃったよ。
溺れるまでどれくらいだろうなー。
気を失うまでさみいんだろうなあ。
しかもなんか変な木みたいの浮いてるし。東京湾きたねえし。服汚れるし。

そういうわけで俺はダイバーシティのラウンドワンでmimaiをやって帰った。
割といいスコアだった。

失ったもの

『失ったもの』

「きみが失ったものは、なんだい」

「場合によっては、僕が取り戻す手助けをしてあげよう。僕は神だからね」

「ぷよぷよの3DSのやつ。カセットだけリュックに入れてたらどっかいった」

「しよぼっ！ 探せよ！ リュックの奥の方とかにあるよ多分。よく探せ！」

「あと夢と希望と仕事」

「急に重いよ！ しかも多いし。ってかそっち先じゃない？ ぷよぷよとかいいだろ」

「せっかく隠しキャラも出したのに……」

「隠しキャラとかいいから。お前はまず仕事探せ。な？」

「ぷよぷよする仕事？ 連鎖なら5連鎖ぐらい作れるよ(´・ω・´)」

「ぷよぷよする仕事なんてないから！ 現実を見なさい！ あと5連鎖ってたいしたことないぞ。」

「神様なんだからぷよぷよする仕事つくってよ」

「10:00から18:00、休憩1時間、週5日ずっとぷよぷよをする」

「結構長い……」

「疲れてもポケモンやモンハンしちゃだめ」

「飽きそう」

「連鎖組めないと上司に怒られる」

「怒られるのはやだなあ」

「一日にwifi対戦で20勝以上というノルマが科せられる。達成できなかつたら残業」

「……」

「それでもやりたい？」

「やりたくない……」

「自分でいい条件の仕事探せ。な？ 俺が見守っとしてやるから」

「うん、わかった。ありがとう」

「そのうち新しい夢や希望も見つかるさ。お前はまだ若いんだ」

「うん」

目を覚ますとそこは見慣れた自分の部屋だった。

変な夢を見ていたようだ。

ひさしぶりに神社に行き、お参りをする。

帰ってきてリュックを見ると、ポケットティッシュのなかに、ぷよぷよのカセットが入っていた

。

あなたのこと、好きでした

『あなたのこと、好きでした』

「あなたのこと、好きでした」

同じクラスの佐藤さんが僕にそう言った。

放課後の体育館裏。ついに俺にも春が来たようだ。

佐藤さんは色白、髪は長めのストレート。よく本を読んでいるのを見る。物静かで大和撫子な感じ。

俺のストライクゾーンど真ん中だ。当然断るわけではない。

「あっ……あう」

しかし突然のことに驚いて声が出ない。

「どうしたの？」

佐藤さんが尋ねる。

おかしい、選択肢が出ない……。

いままでの経験からすると女の子と話した際には選択肢がでるはず。

三択とか四択とか違いはあるけど、それを選んでストーリーが進むって流れだ。

「アッアノー、センタクシガネ……へへッw」

「せんたくし？ わたしじゃダメってことですか？」

「ソツソウジャナクテ……へへッw」

やばい、選択肢早く出してくれ。ヤバい奴だと思われる。汗とかもすごい。

「いっつも鈴木君は物静かで、誰にも媚びない感じがして、かっこいいと思っていました」

「オッオレモ、ソウオモウヨ……フヒッw」

「え？」

「イッイヤー、チガクテソノー……」

選択肢が出ないせいでわけのわからないことしか喋れない。

しょうがないから選択肢の出現は諦めて女子と喋ったことを思い出そう。

「アッ、アノー、チーズバーガーとファンタグレープ。Sサイズで」

「はい。こちらでお召し上がりですか？」

「ヒッ、ヒヤイ」

「鈴木君？」

「ヒッ、ヒヤイ！」

全く役に立たなかった。

汗とかもめっちゃ出る。目が回って来た。

しかしこんなチャンスはない。

ええいままよ！

俺も好きだと伝えよう

「サッ、佐藤しゃん！」

「はっ、はい！」

「僕も佐藤さんの色白黒髪ストレートロング読書好き属性役満でよく昼休みとかよしもとばななよんでるところとか虫とかでるとうひゃあって言うところとか普段はカチっとしてるのによるコンビニ行くときはへんなアディダスのパチモンのスウェットきてるところとか家庭科の調理実習で具とかめっちゃ大きくて雑に切るところとか大好きです。なんかときめきらりメモリアルの藤田さんに似てるよね。あのしっかりしてるのにちょっと抜けてて。あーあの子の攻略難しかったなあー。勉強は勿論、体育とルックスのステータスも重要なんだよねー。最初の一年はひたすら勉強してさあ〜……」

それからの記憶は僕にはありません。

佐藤さんとは付き合えませんでした。

セクシーな整形

『セクシーな整形』

私の名前は桐生美和子。

26歳独身OL。

最近周りの友達がだんだん結婚するようになって焦ってるの。

実は私、いままで一度も恋人ができたことないのよね……。

親からも「早く孫がみたい」なんて言われるし……。

でも、お仕事は一生懸命頑張ってきたし、貯金はあるわ。

だから、気になってる上司の上村さんを振り向かせるために、整形することにしたの。

どういう風に整形すればいいかしら。

そういえば上村さん、新しく入って来た新入社員の園田さんのことをよく見ている気がするわ。

園田さんはどちらかと言えばおとなしいタイプだけど、地味に胸が大きいよね。

そうだ、豊胸手術して胸を大きくすれば上村さんにも振り向いてもらえるんじゃないかしら。

そうと決まれば早速決行よ！

手術は無事成功。

私の胸はFカップになったわ。

私の見立てでは園田さんはEカップぐらい……この勝負、勝った。

あとは呼び出して告白するだけね。

「上村さん」

「なんだい？ 桐生さん」

「ちょっと話があるの。今日仕事終わったら、会議室に来て」

「？ わかった」

舞台は整った。頑張れ美和子！

そしてついに終業後。

「話ってなんだい？ 桐生さん」

「実は、私と付き合っほしいの！」

「え、ちょっと、それは無理だな」

「他に好きな人がいるの？ 園田さんとか？」

「いや違う、彼女は大学の後輩だから親しくしてるだけで」

「じゃあ顔？」

「いや、違うんだ。桐生さん、顔は整ってる方だと思うよ」

「胸も大きいのに。園田さんの胸、チラチラ見てるじゃない！」

「うっ。確かに巨乳は好きだけど……」

「じゃあなんで!？」

「だって、桐生さん、身長が2 m60でしょ……さすがにそこまで大きいと、僕の手には負えない」

また振られてしまったわ……学生の頃からずっとそう。

やっぱり、巨人族と人間のクォーターに普通の恋愛は無理なのかしら。

でも、私は諦めないわ!

いつか、大きい女の人が好きっていう殿方と結婚するんだから!

美和子の戦いは続く。